



宮澤賢治

生誕120周年記念連載

銀河鉄道の夜空へ
Al Nokta ĉielo de la Galaksia Fervojo

弐

午后の授業

文：渡部潤一／「銀河鉄道の夜空へ」制作委員会

写真：飯島 裕／石川勝也（天の川・アルビレオ）

宮澤賢治の宇宙

宮沢賢治。いうまでもなく日本を代表する童話作家である。いや、その影響力は並の作家とは異なり、桁はずれに大きい。同じ時代を生きた作家群と比べてみても、その知名度は現代でさえも抜群だし、その作品に触れたことのない日本人はいないのではないか、と思えるほどである。いまでも「雨ニモマケズ」は、最も有名な散文詩のひとつであり、「銀河鉄道の夜」は、数ある童話の中で最高傑作で、最も読まれている作品のひとつと言っても間違いないだろう。宗教への傾倒と自己犠牲の精神や、学生時代から教師時代を通じて培った理系的素養などが複雑に絡みあって、素晴らしい作品群が生まれている。

ただ、残念なことに、生前にはその才能は認められず、唯一出版した童話もほとんど売れなかった。肺病を患って30代でこの世を去るが、没後の再評価によって作品群が世に出たと言えるだろう。さらにいえば、後に詳しく紹介するが、当時の緯度観測所（現在の国立天文台水沢VLBI観測所）とも関わりのある人物であった。もともと賢治が生まれたのは、現在の行政区分では岩手県花巻市（旧・稗貫郡里川口村）である。そのため、教師の時代に何度か、緯度観測所を訪問しており、作品のいくつかに、その痕跡を見ることができる。

● 困窮する故郷と「理科少年」

はじめに賢治の生まれた頃の時代背景とその賢治への影響を見ていこう。まずは東北の状況である。賢治の誕生は19世紀の末、1896年（明治29年）8月27日である。この頃の東北地方の状況は、かなりひどいものであった。同年の6月には昨年の東日本大震災と同様の規模とされる「三陸地震津波」が起こり、リアス式海岸に沿って2万人以上が死亡している。さらに続く8月には秋田県東部を震源とする「陸羽地震」が起こり、彼の生家周辺でも被害が大きかった。追い打ちをかけたのが冷害である。凶作続きで多くの農民が困窮を極めていた。かつてのNHKの連続テレビドラマ「おしん」の世界のように、家の貧しさと口減らしのため、幼くして奉公に出されるこどもたちも続出していた。

一方、賢治の生家は、そんななかでも比較的安定した状況にあった。というのも、彼の生家は、質・古着商を営む地元の名家だったからである。これが賢治の生き方に大きな影響を与えたことはまちがいない。まずは食うに困らない家に育った少年・賢治は、好奇心旺盛に育っていく。言ってみれば、現代で言うところの「理科少年」として、野山を駆け回り、石や昆虫を集めるのに夢中になった。いわゆる昆虫採集、鉱物収集で、理科少年の一度は通る道といえる。そのため「石っこ賢さん」というあだ名がつけられていたほどである。鉱物採集や化石などの採取は、後年まで続き、最終的にはバタグルミの化石を発見して、学術雑誌に発表されるに至ったほどだ。

いずれにしても、賢治は、当時の理科少年として、石集めから、木の実採取、そして化石掘りに凝っていった。そうして何でも手を出してみる理科少年の習性として、当然ながら、その興味は星にも向けられていった。なにしろ、見上げれば、そこには

満天の星が輝いていたはずだ。その条件は整っていた。理科少年の性向を持つ好奇心旺盛な少年が、見上げた先に満天の星空が在れば、当然ながら興味がそそられるだろう。星への興味は、特に旧制盛岡中学へ入学し、寄宿舎に入った頃に強くなったようだ。そこには山梨から来た、やはり文学に強い興味をもつ友人、保阪嘉内がいたことも影響しただろう。中学時代に、賢治がすでに星にかなり凝っていた様子は、弟の宮澤清六氏の回想録にも綴られている。

「夕方から屋根に登ったきりでいつまで経っても下りて来ないようなことが多くなってきました。丸いボール紙で造られた星座図を兄はこの頃見ていたものですが、それは真っ黒い天空にいっぱいの白い星座が印刷されていて、ぐるぐる廻せば、その晩の星の位置がわかるようになっていたものでした。」
（「虫と星と」宮澤清六）

こうして星に興味を持った理科少年は、当然、さらなる知識を、最先端の情報を求めていくことになる。

● 宗教的熱情

これとは別に、賢治へ影響を与えた大きな環境のひとつは、生家の宗教的雰囲気といってよいだろう。賢治の父は浄土真宗の信仰が篤く、自ら仏教会を主催し、賢治を連れて行ったりしていたようだ。日常のように聞かされていた「正信偈」や「白骨御文章」は暗唱できてしまうほどであったといわれる。こうした家庭環境は、おそらく宗教に傾倒する下地を作ったに違いない。しかし、一方で、中学を出る頃になると賢治は生家、あるいは父への反発が強くなる。なにしろ生家は質屋である。困窮した農家の人が次々に訪ねてくる時代、その様子を目の当たりにして賢治は、そうした貧困に喘ぐ人たちを、いわば食べ物にするような実家の商売そのものが、仏教の教えと相反するのでは無いかと感じていた。そして、そもそもそういった商売を好きになれなかった。こうした状況が、いい意味でも悪い意味でも大きく影響し、父の信仰する浄土真宗とは異なる法華経の教えに傾倒していくことになる。信仰とは一見裏腹に見える実家の質屋という生業への反発は、別の新しい信仰へ向かう要因となったのだ。

こうして、賢治は突然家出をする形で上京し、「国柱会」の門をたたくことになる。大正9年、賢治24歳の時である。最終的には、この家出は同じ宗教の道を歩もうとした友・保阪嘉内が行動を共にすることを拒んだことが一つの要因となり、ほぼ同時に妹トシの病気が知らされ、結局は法華経に生きる道をなかば諦めて、帰郷するという結末となる。その後は、稗貫郡立稗貫農学校の教師となるのだが、いずれにしろ、それまでの宗教的な思索、「ほんとうにみんなの幸（さいわい）のため」に自分自身が進むべき道を模索した経験は、後年のさまざまな作品に陰に陽に現れている。

● 鉄道がやってきた

さらに、もうひとつの時代背景が賢治作品に大きな影響を与えていた。明治から大正時代にかけて、電気や汽車などの遠距



離交通が急速に普及し、それらは庶民の生活に着実に入り込んでいたことだ。いわば産業革命的な流れは着実に進んでいた。賢治が生まれた頃は、花巻駅が日本鉄道（現・東北本線）の駅として開業して間もない時期だったし、岩手軽便鉄道（現・釜石線）の駅が少し離れたところに開業したのは1913年（大正2年）、賢治17歳の頃である。その意味で、新たな鉄道の敷設が理科少年であった賢治に強い印象を与えていたことは間違いない。このふたつの鉄道は、当時は相互乗り入れはしていなかった。というのも、軽便鉄道の線路の幅は日本鉄道のように現在のJRで用いられている1067mm幅よりも狭く、乗り入れそのものができなかったためである。こうした状況はどれも賢治の作品、たとえば「月夜のでんしんばしら」や「シグナルとシグナレス」に現れている。少し詳しく説明してみよう。「シグナルとシグナレス」は、1923年の5月11日から23日まで岩手毎日新聞に掲載された鉄道がメインの短編童話で、主人公はいまほとんど見られなくなった腕木式信号機〔細長い木（腕木）が、その角度を変えることで列車の運転士に進行可か不可かを示す信号機〕である。日本鉄道側を意識した「本線の信号機シグナル」と、岩手軽便鉄道を意識した「軽便鉄道の腕木式信号機シグナレス」がお互いに想いを抱きながら、会話する様子が描写されている。シグナレスの方が女性としたのは、軽便鉄道の腕木式信号機が小さかったからであろう。こうした微に入り細にわたって、賢治作品には当時の最先端の事物がモチーフになっている。それは「銀河鉄道の夜」にも現れている。

● 教師として

賢治が法華経の道を諦め、帰郷し、稗貫郡立稗貫農学校の教師となってからは賢治にとって最も充実し、安定していた頃といってもよい。最愛の妹トシの死に直面はしたが、むしろそれを糧に、表向きは卒業生の就職を世話するために樺太への旅に出て、賢治最大の叙事詩群（『永訣の朝』『松の針』『無声慟哭』『青森挽歌』『樺太挽歌』）を生み出す。それだけではなく、多くの作品が教師時代に核をなしている。この教師職は、もともと賢治が思い描いていた道ではなく、なかば致し方なく引き受けたものだった。しかし、故郷の教師となって生徒と向き合うことが、賢治のその後の作品に大きな影響を与えることになった。農学校そのものが、粗末な茅葺き屋根の建物であり、前身が養蚕講習所だったことから、「桑っこ大学」とも揶揄されていたところだ。そんな状況下、賢治は精神歌、応援歌、行進歌、農民歌、剣舞の歌などを、どんどん作詞作曲して生徒に歌わせていった。未来に向かって進もうと、自らを鼓舞せんとする内容の歌詞に教師も生徒も感動し、精神歌などは、当時の校長から校歌にと請われたほどだった。こうして、賢治は学校の雰囲気を変えていった。生徒も教師も生き生きとしてきたらしい。それにつれて教師時代の作品群は充実していく。学校に備えてあった洋書、特に相対性理論や宇宙や銀河の構造などの本を読破していった時代でもあった。こうしたことが、後の賢治作品にも色濃く影響が現れている。



しかし、賢治は教師職で満足できなくなっていた。卒業生を教育して送り出すことだけで、まるで賢治の生き方としては机上の空論に思えたのではないだろうか。やがて、彼はこのままで自分はよいのか、という思いにさいなまれるようになっていく。そんな思いを表に出だすのは、1924年（大正14年）の頃で、賢治は近い人に「教師を辞めようと思っている」という発言をするようになる。そして、真剣に自ら農業に向き合おうとする。1925年4月13日付けで元農学校の卒業生で、樺太の会社に就職させた杉山芳松氏にあてた手紙が残っている。その一節に、賢治の思いがにじみ出ている。

「わたくしもいつまでも中ぶらりんの教師など生温いことをしてゐるわけに行きませんから多分は來春はやめてもう本統の百姓になります。そして小さな農民劇団を利害なしに創ったりしたいと思ふのです。」

もちろん、賢治は教師として農業を教えてきた。そして、農家の息子たちが、農業について学び、卒業していく姿を見送っていた。それなのに自分の役割に納得できなかった。農家の息子たちも何人かは学費が払えず、退学して行かざるを得ない状況も賢治に追い打ちをかけた。自らが農業に従事なくては、という思いが強くなっていった。安定した教師という職を捨てることは、当時としては並大抵の決心ではない。だが、もともと自ら強く希望した職ではなかったし、そしてあの人生を共にしようとしたほどの心の友であった保阪嘉内も故郷・山梨で農業に従事しはじめていたことも少なからず影響している。

こうして、1926年（大正15年）3月末で学校を依願退職し、賢治は花巻町下根子桜に住み始めた。祖父が北上川の河岸段丘となっている高台に柁葺二階建ての宮澤家の別宅として建てたところである。東側に北上川を見下ろす眺望が優れた場所で、段丘を川へと下った降りたところに畑があった。これがいわゆる「下ノ畑」である。一階の六畳間を、皆が集えるように改造し、5月には早くもレコード・コンサートや子どもたちへの読み聞かせなどを始めた。地元でも先生の退職はニュースとなった。岩手日報には「新しい農村の 建設に努力する 花巻農学校を 辞した宮澤先生」という談話が掲載された。そこには「農村経済の勉強と工作をし生活即ち芸術の生きがいを送りたい」という賢治の決意の一端も紹介されている。理想を追求しつつ、8月には「羅須地人協会」の設立を宣言し、農家の青年たちに声をかけ、農業や農民芸術などの講義や、肥料の相談をはじめとする活動を開始する。その活動は半年以上にわたって続いた。ただ、特に芸術に關しての活動は、保守的な農村にはなかなか受け入れられず、出入りするのは主に子どもたちから若い世代であった。出入りしていた青年たちは「農民芸術学校」と称していた。

● 石っこ賢さん

しかし、慣れない農業生活は賢治の体をむしばんでいく。農業指導、特に肥料設計に東奔西走して、伊豆大島などへも出向いているのだが、その無茶がたたって、下根子の羅須地人協会は閉じざるを得ず、実家に戻って病床に伏すことになる。賢治は、自らの羅須地人協会の試みに対して、かなり後悔していた。

そんな病床にあった賢治に再び思いがけない光明が差し込む。1929年（昭和4年）、鈴木東蔵という東北砕石工場主が訪ねてきた。石灰肥料を作って、それを販売しているのだが、賢治に相談に来たというのだ。もともと賢治は「石っこ賢さん」と呼ばれていたほど、石好きの理科少年であり、また農業化学と肥料を学び、石灰の重要性をいち早く認識し、教師時代には、それを授業で教えていた人物である。羅須地人協会時代を通じて、多くの農家に無料で肥料相談をうけ、肥料設計書を書いていたが、当然ながら土壌改良・酸性度の中和のために石灰は必須であった。多くの資料設計書に石灰岩抹を勧めていた。その意味で、知らず知らずのうちに賢治は、東蔵の工場で生産される石灰肥料の普及に携わっていた。一方、事業がはかばかしくなかった東蔵の方は、”肥料の神様”とまで言われていた賢治の知識や智恵にすがりつきたい思いがあった。賢治は様々な形で、この工場に知恵を貸した。たとえば、石灰肥料の商品名を「石灰岩抹」あるいは「石灰岩粉」などから「炭酸石灰（いわゆる、タンカル）」とすることを提案したのも賢治である。

こうしている間に病も癒えてきて、賢治は工場の技師として働くことになった。とはいっても、実際に工場で働くのではなく、花巻にいながらにして、販売を担当する営業職のようなものである。あちこちにでかけては石灰肥料の有用性を説き、あるいは工場のために新しい製品を考えたりするようになる。しかし、ここでも賢治の悪い癖が出て、自らを省みずに東奔西走して、賢治自身の体を痛めてしまう。体調の悪い中、岩手で算出する大理石の重い壁材のサンプルをトランクに入れ、上京した賢治はそのまま神田で倒れてしまった。昭和6年9月のことで、宿では遺書をしたためたという。一週間ほど寝込んだ末、帰郷した賢治は、自宅に戻り、再び病の床につき、病状は一進一退だったが、その間にも創作活動や肥料相談などを受けていた。この死の床で生まれた代表作が「雨ニモ負ケズ」である。しかし、1933年（昭和8年）9月にはついに帰らぬ人となってしまふ。享年37歳の若さであった。

● “複線” の作品世界と未成の「銀河鉄道の夜」

賢治の文学作品について、ここでは詳細には語ることはないだろう。ひとつだけ指摘しておくとするれば、賢治作品の童話には一定のパターンがあることだ。物語の土台として、もともとが現実離れした夢の世界が舞台となっている。そして、しばしばその世界から一段高いところへ飛翔する。いわば夢の世界の上にある幻想世界へ飛翔する。そして、終盤で、土台である夢の世界へと降りてくるのである。

「銀河鉄道の夜」は、実に忠実にこのパターンとなっており、その意味でも賢治が総力を挙げて作り上げようとした（賢治自身は、まだ改訂の最中だったと考えられる）作品である。そして、賢治の思想だけでなく、科学的・天文学的知識も凝縮されているといえる。死の直前に発表した「グスコブドリの伝記」にも見られる科学の最先端知識に加え、最新の天文学的知識、「雨ニモマケズ」に現れる自己犠牲の精神、北十字から南十字への旅に織り込まれた宗教性。それらすべて賢治が生涯を通して獲得していった様々なものが見事なまでに昇華した作品なのである。どんなところに何が織り込まれているかの分析は次の機会に詳細に紹介したい。

●宮澤賢治と旧緯度観測所

(現・水沢VLBI観測所)

●風野又三郎と木村博士

ご存じと思うが、宮澤賢治は水沢地区にある国立天文台の水沢VLBI観測所（旧緯度観測所）を何度か訪問している。ちょうど農学校の教師をしている頃である。当時最先端を誇った観測所であったことから、その影響は賢治作品に大いに影響を与えている。

その代表が「風の又三郎」である。最終版には、陽に観測所の名前は出てこないが、初期の原稿である「風野又三郎」には緯度観測所に木村榮先生がテニスのシーンで実名で登場する。又三郎が先生の打ったテニスボールにいたずらをする様子が描かれている。

『そうだ、そのときは僕は海をぐんぐんわたってこっちへ来たけれども来る途中とちゅうでだんだんかけるのをやめてそれから丁度五日目にここも通ったよ。その前の日はあの水沢の臨時緯度観測所も通った。

(中略)

すると俄かに下で『大丈夫です、すっかり乾きましたから。』と云う声がするんだろう。見ると木村博士と気象の方の技手とがラケットをさげて出て来ていたんだ。木村博士は瘠せて眼のキョロキョロした人だけれども僕はまあ好きだねえ、それに非常にテニスがうまいんだよ。僕はしばらく見てたねえ、どうしてもその技手の人はかなわない、まるっきり汗だらけになってよろよろしているんだ。あんまり僕も気の毒になったから屋根の上からじっとボールの往来をにらめてすきを見て置いてねえ、

丁度博士がサーヴをつかったときふうっと飛び出して行って球を横の方へ外そらしてしまったんだ。博士はすぐもう一つの球を打ちこんだねえ。そいつは僕は途中に居て途方もなく遠くへけとばしてやった。

『こんな筈はないぞ。』と博士は云ったねえ、僕はもう博士にこれ位云わせれば沢山だと思って観測所をはなれて次の日丁度ここへ来たんだよ。』

その頃の緯度観測所は「臨時緯度観測所」と呼ばれており、木村先生もテニスをしていたことは事実である。賢治は、その様子を実際に見て、描写したことは間違いない。

驚くべきは、それだけではない。この童話の中で、又三郎の次の発言がある。

「もちろん僕は東京なんかじゃないさ。一年中旅行さ。旅行の方が東京よりは偉えらいんだよ。旅行たって僕のはうろうろじゃないや。かけるときはきいっとかけるんだ。赤道から北極まで大循環さえやるんだ。東京なんかよりいくらか知れない。」

さらに大循環の話を知りたいという子に向かって

「大循環の話なら面白いけれどむずかしいよ。あんまり小さな子はわからないよ。」

という。大循環は大気大循環であり、当時の緯度観測所は日本で初めて高層大気のパルーン観測をしたところでもある。賢治は、当時最新の大気大循環の理論や観測結果を、緯度観測所で聞いた上で、それを童話に昇華させようとしていた。このあたりは水沢OBの大江氏らの研究で明らかにされている（大江・白木、2015、宮澤賢治研究Annals、25号）。その意味で、緯度観測所は賢治に大いに新しい発想を与えたといえる。



旧緯度観測所時代からの古い石橋を渡る。おそらく賢治も…。



かつてのテニスコート
（『緯度観測所100年』より）

● 水沢の天文台

童話では「土神と
きつね」にも「水沢
の天文台」が描かれ
ている。

「(前略)

たとへばアンドロ
メダにもオリオンに
も獵犬座にもみんな
あります。獵犬座の
は渦巻きです。それ

から環状星雲といふものもあります。魚の口の形ですから魚口星
雲とも伝ひますね。そんなのが今の空にも沢山あるんです。」
「まあ、あたしいつか見たいわ。魚の口の形の星だなんてまあ
どんなに立派でせう。」
「それは立派ですよ。僕水沢の天文台で見ましたがね。」

賢治は実際に望遠鏡で天体を眺めさせてもらったのかもしれない。

また、有名な詩集「春と修羅」の「晴天恣意」は、もともと
「水沢緯度観測所にて」という副題がついているほどで、観測
所を訪問したときの印象を、そこから眺めた風景とともに描写
した詩である。

「(前略)

雲量計の横線を
ひるの十四の星も截り
アンドロメダの連星も
しづかに過ぎるとおもはれる
碧瑠璃の天でありますので
いまやわたくしのまなこも冴え
ふたゝび陰気な扉を排して
あのくしゃくしゃな数字の前に
かゝり込みますとしますのです」

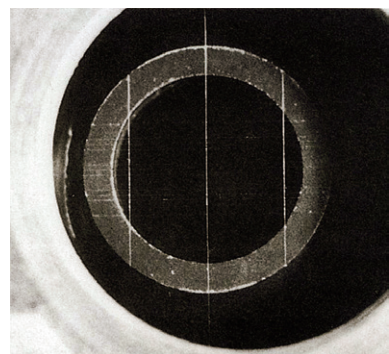
この部分の雲量計は、実は下書原稿では「天頂儀の蜘蛛線を」と書かれていた。当時の天頂儀などは、実際に蜘蛛の糸を張って、その線を横切る恒星の計測をしていたことを学び、それを素直に表現したわけだ。しかし、それを雲量計に直してしまった意図は、よくわかっていない。ただ、当時は構内に「櫛形測雲計」という設備があり、実際には雲量を眼視する際の範囲や方向の目安にする器具らしいが、雲量計ではない。これを賢治は「雲量計」としてしまったのではないかと、とも言われている。(例えば、須川力（前緯度観測所地球物理観測研究部長）著「星の世界 宮沢賢治とともに」1979)

● アルビレオの観測所

そして、きわめつけは「銀河鉄道の夜」の、アルビレオの観測所である。

『「もうここらは白鳥区のおしまい
です。ごらんなさい。あれが名高
いアルビレオの観測所です」

窓の外、まるで花火でいっば
いのような、あまの川のまん中に、
黒い大きな建物が四棟ばかり立っ
て、その一つの平屋根の上に、眼
もさめるような、青宝玉（サファ
イア）と黄玉（トパーズ）の大き
な二つのすきとおった球が、輪に
なっけしづかにくるくるとまわっ
ていました。』



眼視天頂儀の測微尺（マイクロメーター）の視野に張られた蜘蛛の糸
（『緯度観測所100年』より）

水沢の緯度観測所を、はくちょう座の有名な二重星アルビレオにたとえて描いている。ここでもアルビレオが連星であるという知識は、相当に本を読み込まないと持ち得ない知識である。賢治が読んだとされる『肉眼に見える星の研究』（吉田源治郎著 警醒社 1922）の記述には、確かに「トパーズのような黄色に輝き、小さい方は、サファイアのような碧色」とある。

水沢の緯度観測所で刺激を受けた賢治が、その感性をバネに様々な形で、最新科学の知識を組み合わせせて昇華させたのが「銀河鉄道の夜」なのである。その意味で、緯度観測所の影響の大きさは計り知れないのである。

